

伊藤仁斎における本体修為論の形成過程

益田貴裕

伊藤仁斎は、内面に養われる仁を「本体」、他者に対する忠信敬恕の実践を「修為」と呼び、本体と修為とを、つまり内面的徳と具体的実践とを、次のような双方向的影響関係によって結びつけた。修為である忠信敬恕の実践は、本体である仁を内面に養う。だがその一方で、仁は忠信敬恕の実践によって他者へと発揮される。つまり修為は本体を養うのであるが、本体は修為を通して発揮される。そして本体と修為とのこの往還的反復によって、道との一体性である誠を確立できる。以上の内容は既に発表する機会を得ているが、このような仁斎の考えを「本体修為論」と呼ぶことにする。

今回の発表では、この本体修為論の形成過程を、仁斎若年時に執筆された、敬斎記、鵝湖異同弁、仁説、立誠持敬説の分析を通して、追跡することを予定している。本体修為論は以下の経緯を辿って形成された。第一に、立誠持敬説における誠と忠信敬恕、仁説における仁と恕、これらが組み合わされて、本体修為論が成立した。第二に、本体修為論に特徴的な、内面と実践との双方向的影響関係は、これら二説より以前の、鵝湖異同弁における仁と智の関係にまで遡ることができる。というのも異同弁においては、智から仁へ向かうことと、仁から智へ向かうこと、この両方が不可欠だとされるからである。第三に、異同弁より以前に執筆された敬斎記には、敬は仁を養う、という主張が見出される。これは実践から内面へという一方向的な影響関係であるとはいえ、本体修為論につながる、複数の徳を組み合わせることで内面と実践との関係を構築する発想の原型であるといえる。年代を遡ることによって仁斎の思想形成を辿るならば、本体修為論の形成過程を以上のように把握することができる。